

中学高校での英語教育で英語が習得出来ない訳

——学生の性格型から英語教育を考える——

安藤 則夫^[1], 長谷川 修治^[1]

[1] 植草学園大学発達教育学部

(要旨) 今までの著者らのアンケート調査では、英語が不得意と思う学生が多かった。その原因が多数の学生の性格型に合っていない英語教育法にあると予想し、確かめた。学生の性格の違いは、勉強への意欲や勉強法の違い・成績や習得の違いとなって現れると考えられる。今回は、アンケートによって学生の性格から見たニーズを明らかにし、性格の違う学生が自分に合った勉強の仕方を出来るようにする教材について検討した。アンケートの結果、活発型の学生が多かった。活発型の学生は、集中力を求められる授業が苦手であり、学習の成果が得られないことが分かった。また、学習の成果を得るには、理解できることが重要であると考えられ、英語のあらゆる面での理解が簡単に得られる教材について検討した。それは、集中力が弱くても飽きさせない英語の持つ多層的情報が得られやすい教材であると予想され、そのような教材の可能性について検討した。

キーワード：学生の性格、活発型の学生、英語の理解、英語教材、多層的情報

1. はじめに

1.1 知識不足が自発的な学習を生み出す

小学校での英語教育の本格化に合わせて、著者らは効果的に学べる教材を開発してきた。その狙いは確実に記憶に残る教材である。そのために心理学における記憶研究の知見に基づいて教材開発を行った(長谷川・安藤, 2014)。その教材は、学習した直後よりも学習して1～2週間経った方が記憶量が増えるというものであった。いわゆるレミニセンスが現れやすい教材であった(長谷川・安藤, 2018)。

レミニセンスに関する文献調査によって、レミニセンスは、知識が乏しい学生が知識を補うための自発的な反復的想起によってもたらされるものと考えられた(安藤・長谷川, 2015)。知識不足が知識を得たいという要求を生み出すと考えられる。

1.2 知識不足が自発的な学習を妨げる

一方、U大学の学生に対して行ったアンケートに

よって、中学・高校の時の英語学習が嫌いであり不得意であったと答えた学生が8割にもものぼることが分かった(安藤・長谷川, 2018)。これは、中学・高校での英語教育がうまく行っていないことを示している。

そのことに危機感を覚えた著者らは、学生がアクティブに学習出来るための条件を検討してきた。学生は様々な個性を持っているので、その個性に合ったことが大切ではないかと考えられた。学生の個性を情緒的反応性から捉え、学生を「緊張型」「興奮型」「弛緩型」に分けて検討した結果、興奮型の学生は、記憶を好まず、英語学習を苦手と感じる者が多かった(安藤・長谷川, 2018)。

さらに、アクティブな学習を妨げている要因が、理解できないことであることが示唆された。理解がなければ、英文を聴いたり読んだりしても面白さが分からず、英語学習はつまらなくなる。また、理解出来ないことが落ちこぼれ感を高め、学習への意欲減退につながると考えられる(安藤・長谷川,

2020)。

レミニセンスのように知識が不足するために自発的な学習意欲が高まることがあるのに反して、なぜ理解出来ないことが英語学習への意欲を失わせるのだろうか。この問題を解くことが、英語学習への動機づけを高める道ではないかと考えられる。

1.3 分からないことを分かりたいと思う性格

学習している英語が理解出来るかどうかは、英語学習にとって重要と考えられる (Krashen, 1981)。理解出来ることで、英語の内容の面白さを感じることができ、英語に対する興味や学習意欲が高まる。

逆に英語が分からなくて分かりたいという要求が高まる場合もあることは先に述べた。英語が理解出来ない場合、理解しようと努力するか努力しないかの分岐点は何であろうか。それが分かれば、英語が理解出来ないために英語学習を嫌い諦める学生を救う手段が分かるのではないかとと思われる。

理解するために努力をするかどうかの1つの要因は、理解の困難さにあるだろう。分からないことに直面した時、容易に理解出来れば少しは努力して理解しようとするはずであるし、理解が困難であれば理解のための努力を諦める可能性は高くなるだろう。これは、英語の難易度の問題である。この点から言えば、学習努力への諦めを少なくするためには、英文を理解可能なレベルに下げれば良いことになる。

しかし、英語の難しさが同程度であり同じ程度の英語能力を持っていても、ある学生は努力して理解しようとする一方、別の学生は努力しないことがある。この場合には、学生の性格が関係してくるだろう。つまり、困難でも頑張る性格か頑張れない性格かが、理解するために努力するかしないかに関係すると考えられる。この点での解決法は、各々の学生の性格に合った学習形態を構築することである。個性に合わせた授業形態については既に検討している (安藤・長谷川, 2019) ので、今回は教材に焦点を当てたい。

1.4 学習に影響する性格

個性と言えば、学習スタイルである。学習スタイルに関する研究は多い (Coffield, et al., 2004)。しか

し、学習スタイルと同様かそれ以上の影響力を持つのが性格である (Sadeghi et al., 2012)。

性格は、どのような内容や活動に興味を持ち、好きになるかや、どのようなプロセスで技能を獲得するかに関係している。社交的な人は、社会的なスキルが高く、英文を聴き読む時にも、心理を読み取るのが得意になる (Matthews, 1999)。外向性、内向性という性格型について見てみると、外向的な人は、短期記憶は得意だが、注意力に欠ける。また、頻繁に多様な交流のある社会的環境を好み、ストレスの高い課題を好む。そして積極的、楽天的である。一方内向的な人は、情報量(刺激)が少ない環境を好む。

神経質な人は、不安になりやすく否定的感情を持ちやすい。作業記憶は苦手な、悲観的評価を持ちやすい。課題が易しい時にうまく出来、正のフィードバックが与えられて気持ちが安定する。このような安心できる状況で力を発揮する。学習のためには自信を持たせることが重要である (Matthews, 1999)。

佐伯 (1992) は、性格が外国語習得の可否を決めると述べている。日本人は恥ずかしがりである点で外国語習得がうまく行かないという。

著者らは、このように性格が学習に影響するので性格に合わせた英語教育が行われるべきだと考えている。筆者らの性格指標は、情報処理の仕方と密接に関係している情緒反応性に基づいている (安藤・長谷川, 2018)。それは、「緊張型」「興奮型」「弛緩型」であった。簡単にその特徴を述べると、「緊張型」は、学習に集中し、納得した考えを固定的に保持しやすい。「興奮型」は、注意の転換が速く、多方面にわたる情報収集を得意とする。飽きやすい性格である。「弛緩型」は、心にゆとりがあり、注意範囲が広く、柔軟な思考が出来、新奇な情報の受容性が高い (詳しくは、安藤・長谷川, 2018 を参照)。

今回もこの情緒反応性に基づき考察する。ただし今回はインターネットを通じてアンケートを取ったために質問の内容を従来のアンケートよりもかなり簡素化した。表現も分かり易く「真面目型」「活発型」「ゆったり型」とした。「緊張型」は「真面目型」に、「興奮型」は「活発型」に、「弛緩型」は「ゆったり型」に対応している。

1.5 情緒反応型から見た英語学習

情緒反応型と学習の関係を見てみると、真面目型は集中して勉強する傾向にあり、学習への動機づけがあれば英語力を身に付けることは容易であろう。活発型は注意が転換しやすく、知識を深めることが困難と考えられる。ゆったり型はゆとりを持ちながら広範囲の情報を結びつけて理解するので、学習を楽しむと思われる。

今回の研究では、各々の性格（情緒反応型）の学習への取り組み方を調べ、その面から英語学習への意欲の減退の意味を検討し、どのような教材を作成すればどの性格の学生でも意欲的に学習に取り組めるのかについて考察したい。

2. 目的

2.1 仮説の設定

次のような仮説を立て、検証することが目的である。

仮説1。性格によって勉強の取り組み方が違い、それが成績に反映するであろう。「真面目型」「活発型」「ゆったり型」で見ると、真面目型の学生が成績は良いであろう。「落ち着きのなさ」を持つ活発型の学生は、集中を必要とする学習を苦手と感じ、成果が得られない可能性が高いであろう。

このような仮説が確かめられれば、活発型の学生の学習を助ける手段を考えることが、英語教育の成果を向上させることにつながると言えるだろう。

仮説2。英語の成績が悪い学生は、基礎的な部分の理解が欠けているのではないかと。もし、これが確かめられたのであれば、基礎的な理解を高める方策を考えることが大切と思われる。

仮説3。学生の多様なニーズに応えられる英語教材を作ることが、成績の良い学生も悪い学生も、英語力を伸ばすことに役立つのではないかと。この仮説に関しては、本論では確かめられないが、先の2つの仮説に基づいて多様なニーズに応える教材を考え、これからの提案に活かしていきたい。

3. 方法

3.1 アンケートの手続き

2020年7月29日、遠隔で実施した心理学の性格

に関する授業に合わせ、大学のポータルサイトで「性格と英語学習の関連を調べ、最適な授業を構築するため」と説明し、受講学生（161名）にアンケートへの回答を依頼した。アンケートはポータルサイトからアンケートの質問をコピーし、メールで回答するという形にした。送られて来た回答は、結果だけを抜き出し、回答者を特定できる情報は、即時に消去した。3週間ほどの期間に93名の学生から回答を得た。

3.2 アンケートの内容（性格から見た勉強法）

1で、年齢と性別について質問した。

2で、性格から見た勉強法について質問した。性格を真面目型、活発型、ゆったり型の3つの型に簡潔に分けてその型の勉強法を短く記述し、学生に自分に当てはまる性格（性格に合った勉強法）を選択させた。

それぞれの型の説明は次の通りである。真面目型「読書や勉強に集中できる。時間の経つことを忘れることが多い」。活発型は、「読書や勉強では飽きやすいし、余分な考えが浮かび集中できない」。ゆったり型「読書や勉強をして、意味や心情が分かって、満足感を覚える」。

3.3 アンケートの内容（英語の勉強への取り組み方）

3では、中学・高校での英語の授業や家での勉強に積極的に取り組んできたか、成績はどうであったかについて聞いた。実際の質問は、「中学・高校での英語の勉強がどうであったか思い出してください」である。そして「積極的に勉強した」から「ほとんど出来なかった」までの4つの項目（以下、積極的、やや積極的、やや消極的、消極的と表記）から選択させた。

成績については、「良かった」「普通」「悪かった」の3択である。しかし、実際の成績は不明である。

3.4 アンケートの内容（勉強で大切にすること）

4では、勉強をする上で何を大切にすることかを質問した。1つ目は「理解と記憶」。これは、学んだことを理解ししっかりと身に付けることを大切にしているかという問いである。2つ目は、「意味の把握」。英語を読んだり聞いたりする時に、意味が分

かればよいという考えであるかどうかを問うものである。3つ目は、「感動や面白さ」。英文の感情面での影響を大切にしているかを問うものである。4つ目は、その他として大切にすることがあれば書いてもらった。

このような学習面の価値観は、性格によって偏りがあるかどうかを確認するものであった。

3.5 アンケートの内容 (勉強の成果)

5では、「英語の勉強で実際に身に付いたこと」を聞いた。英語を覚えスラスラ言える (以下, 流暢さ), 英文を聞いて分かる (以下, 聴く力), 英文を読んで理解出来る (以下, 読む力), 辞書を引いて読解出来る (以下, 辞書使用), 英語が身に付いたとまでは言えない (以下, 成果なし) の5項目から当てはまるものを選択してもらった (複数回答可)。

3.6 アンケートの内容 (英語授業の進行速度)

6では、英語の授業の進み方をどう感じたかを質問した。回答は、「ゆっくりだった」から「速すぎた」までの4択 (以下, ゆっくり, やや速い, かなり速い, 過度に速いと表記) である。

(これらのアンケート内容は附録として参考文献の後に記した)

3.7 倫理的配慮

アンケートを実施するにあたり、その趣旨と用途について学生の了解を得た。また個人が特定できる情報は、結果の記録の際に消去し、本編でも個人情報に一切触れていない。

4. 結果

4.1 全体のアンケート結果

93名の学生から回答を得た (回答率, 57.8%)。成績に関して1名の記入漏れがあったが、その他の部分は回答されていたので、成績を除き分析に加えた。なおアンケート結果は学生の自己申告であり、学生の英語教育・自分の性格に対する思いについての分析になる。自己申告結果は、真面目型8人, 活発型60人, ゆったり型25人であり、活発型が最も多かった (表1)。

表1 性格別の人数

真面目型	活発型	ゆったり型	合計 (%)
8(8.6)	60(64.5)	25(26.9)	93(100)

4.2 性格別から見たアンケートの結果

まず、性格を基準としたアンケート結果を見てみよう。

英語の勉強への取り組み方について、全体的に見るとやや積極的に勉強したという学生が多く、積極的と消極的の二分法で見ても、積極的が57.0%と5割を越えていた。ただし、消極的な学生も4割以上いた。(なお、中学と高校で取り組み方が違い複数回答した学生が1人いたため、人数と回答数に違いが出た)

性格別に見ると、真面目型は全員が積極的・やや積極的であった (100%)。ついで積極的・やや積極的が多かったのは、ゆったり型で64.0%であった。活発型は積極的・やや積極的な学生は48.4%にとどまり、消極的學生が18.3%いた (表2)。

表2 性格と英語の勉強への取り組み方

取り組み方 回答数(人数)	真面目型	活発型	ゆったり型	合計
積極的	2(25.0)	4(6.7)	2(8.0)	8(8.6)
やや積極的	6(75.0)	25(41.7)	14(56.0)	45(48.4)
やや消極的	0(0)	21(35.0)	8(32.0)	29(31.2)
消極的	0(0)	11(18.3)	1(4.0)	12(12.9)

(ただし%は、人数を100とした。後の表も、複数回答の場合は同様に計算した)

自己申告による成績は、68.8%が普通以上と答えた。性格別に見ると、真面目型では、全員が普通以上と答えた。ゆったり型では、72.0%が普通以上と答えた。活発型の学生は普通以上が、63.3%にとどまった (表3)。

表3 性格と自己申告による英語の成績

成績 回答数(人数)	真面目型	活発型	ゆったり型	合計
良い	3(37.5)	6(10.0)	2(8.0)	11(11.8)
普通	5(62.5)	32(53.3)	16(64.0)	53(57.0)
悪い	0(0)	21(35.0)	7(28.0)	28(30.1)
不明	0(0)	1(1.7)	0(0)	1(1.0)

英語の勉強への意見（大切にすること）を問う質問では、学生のほぼ半数が意味の把握と答え、楽しむことと理解と記憶は20%台であった。性格別に見ると、真面目型は、意味把握と楽しむことが共に40%近くであった。ゆったり型も真面目型と似た回答パターンであった。活発型は、意味把握が51.7%と多く、理解と記憶、楽しむことが20%台であった（表4）。

表4 性格と勉強で大切にすること

大切な事 回答数(人数)	真面目型 8(8)	活発型 65(60)	ゆったり型 27(25)	合 計 100(93)
理解と記憶	1(12.5)	15(25.0)	4(16.0)	21(21.5)
意味把握	3(37.5)	31(51.7)	9(36.0)	43(46.2)
楽しむこと	3(37.5)	13(21.7)	9(36.0)	25(26.9)
その他	1(12.5)	6(10.0)	5(20.0)	12(12.9)

英語の勉強において何を大切にするかの質問でのその他の記述式回答では、回答数が少ないのであるが、真面目型の学生が日常会話能力という応用力を挙げたのに対して、ゆったり型は会話力も挙げたが、単語を調べるといった読解力を重視する学生が2人いた。活発型は、単語（熟語）の記憶といった基礎力を大切と考える学生が3人いた（表5）。

表5 性格と大切にすることでのその他の回答の内容

真面目型	日常会話の能力
活発型	文章読解力、単語（熟語）の記憶×3、聞き取り力、文法学習、
ゆったり型	読み書き会話力、単語を調べ理解する×2、単語・文法の記憶

英語の勉強で得られたことを問う質問では、学生全体で見ると、流暢さは、9.7%であった。一方、成果なしは、22.6%であった。最も多かったのは、辞書使用で、71.6%にのぼった。また、36.6%の学生が、読む力と答えた。

性格別に見てみると、流暢さは、真面目型が25.0%と一番多く、活発型とゆったり型は共に8%程度であった。成果なしの割合が高かったのは、活発型で26.5%であった。最も多い回答で見ると、真面目型は読む力の項目であったが、活発型とゆったり型では共に辞書使用の項目が多かった。聴く力は、流暢さを除けば、どの型の学生も低い割合

であった（表6）。

表6 性格と成果

成 果 回答数(人数)	真面目型 14(8)	活発型 75(60)	ゆったり型 39(25)	合 計 128(93)
流暢さ	2(25.0)	5(8.3)	2(8.0)	9(9.7)
聴く力	2(25.0)	9(15.0)	5(20.0)	16(17.2)
読む力	5(62.5)	18(30.0)	11(44.0)	34(36.6)
辞書使用	4(50.0)	27(45.0)	17(68.0)	48(71.6)
成果なし	1(12.5)	16(26.5)	4(16.0)	21(22.6)

授業の進行速度についての質問では、93名の学生のうち1名が中学と高校で進行速度が違ったとして複数回答したので、回答数の合計は、94になった。学生全体ではやや速いと答えた学生が半数ほどであった。かなり速い・過度に速いと答えた学生は、29%であった。真面目型の学生では、62.5%がゆっくりと答えた。活発型では、16.7%がゆっくりと答えたが、やや速いが51.7%、かなり速い・過度に速いが31.7%であった。ゆったり型は、24.0%がゆっくり、28.0%がかなり速いと答えた（表7）。

表7 性格と授業の進行速度

進行速度 回答数(人数)	真面目型 8(8)	活発型 61(60)	ゆったり型 25(25)	合 計 94(93)
ゆっくり	5(62.5)	10(16.7)	6(24.0)	21(22.6)
やや速い	2(2.5)	31(51.7)	12(48.0)	45(48.4)
かなり速い	1(1.3)	15(25.0)	7(28.0)	23(24.7)
過度に速い	0(0)	4(6.7)	0(0)	4(4.3)
不明	0(0)	1(1.0)	0(0)	1(1.0)

性格別に回答の特徴をまとめてみると、真面目型は、英語の勉強に積極的に取り組む学生が多く、成績も普通以上であった。大切と思うことは、意味把握と楽しむことが共に4割弱であった。記述式での回答には「日常会話の能力」が書かれていた。成果としては、読む力を挙げた学生が多かったが、辞書を引いて理解できる程度の学生も多かった。授業の進行速度では、ゆっくりと感じた学生が多かった。

活発型の学生は、英語の勉強にやや積極的に取り組む学生が41.7%と一番多かったが、やや消極的・消極的だった学生も53.3%もいた。成績では普通と答えた学生が、53.3%であったが、悪いと答えた学生が35.5%もいた。大切と考えることでは、意

意味把握が 51.7%と多く、理解と記憶、楽しむことが共に 20%台であった。記述式回答では、単語を覚えることを挙げる者が多かった。成果で見ると、辞書を引いて理解する程度が 45%と多く、成果なしも 27%いた。授業の進行速度に関しては、やや速いが 52%と多かったが、かなり速い・過度に速いが 32%もいた。

ゆったり型は、英語の勉強への取り組みでは、やや積極的が 56.0%と最も多いが、やや消極的・消極的も 36.0%であった。成績は、普通と答えた学生が 64.0%いたが、悪いと答えた者も 28.0%いた。意味把握と楽しむことが共に 36.0%であった。記述式回答では、読み書き会話力と全般的な力を指摘した者がいたが、単語力を書く者が多かった。成果については、辞書を引いて理解する程度が 68%とかなり多かった。次に読む力である。成果なしと答えた者も、16%いた。授業の進行速度については、やや速いと感じる学生が半数ほどであったが、ゆっくりが 24%、かなり速いが 28%であった。

4.3 成績別から見たアンケートの結果

次に、成績を基準としたアンケートの結果を見てみよう。(成績未回答者が 1 名で、92 名が学生数)

成績と英語の勉強への取り組み方の関係を見ると、成績が良いと答えた学生の多くが積極的・やや積極的と答えた。普通と答えた学生では、積極的・やや積極的が 64.1%であったが、やや消極的・消極的が 35.9%であった。成績が悪いと答えた学生は、やや積極的が 25.0%、やや消極的・消極的が 74.8%であった。

成績の良い学生ほど積極的に勉強し、成績の悪い学生は消極的だと言える(表 8)。

表 8 自己申告による成績と勉強への取り組み方

取り組み方 回答数(人数)	良い 12(11)	普通 53(53)	悪い 28(28)	合計 93(92)
積極的	5(46.5)	3(5.7)	0(0)	8(8.7)
やや積極的	6(54.5)	31(58.4)	7(25.0)	44(47.8)
やや消極的	0(0)	16(30.2)	13(46.2)	29(31.5)
消極的	1(9.1)	3(5.7)	8(28.6)	12(13.0)

次に、成績と大切とすることの関係を見てみよう。成績が良い学生は、理解と記憶を重視する者が

36.4%と多い。楽しむことを挙げたのは 18.2%であった。成績が普通と答えた学生では、意味把握が 45.3%と多く、次に楽しむこと、理解と記憶が続く。成績が悪いと答えた学生では、意味把握が 60.5%と最も多く、楽しむこと、理解と記憶を挙げる学生は少なかった(表 9)。

表 9 自己申告による成績と勉強で大切にすること

大切な事 回答数(人数)	良い 11(11)	普通 57(53)	悪い 30(28)	合計 98(92)
理解と記憶	4(36.4)	11(20.8)	5(17.9)	20(21.7)
意味把握	1(9.1)	24(45.3)	17(60.5)	42(45.7)
楽しむこと	2(18.2)	15(28.3)	8(28.6)	25(27.2)
その他	4(36.4)	7(13.2)	0(0)	11(12.0)

成績と英語の勉強で大切にすることとの関係を記述の回答で見ると、良いと答えた学生は、文法学習や文章読解力を挙げた一方で、読み書き会話能力や日常会話の能力という応用力を指摘する学生がいた。普通の学生は、単語の記憶や理解や聞き取り力という基礎的な力を挙げたがいた。悪いと答えた学生には、記述式回答はなかった(表 10)。

表 10 成績と大切にすることでのその他の回答の内容

良い	文法学習、文章読解力、読み書き会話力、日常会話の能力
普通	単語(熟語)の記憶×3、単語を調べ理解する×2、聞き取り力、単語・文法の記憶

勉強の成果について見てみると、成績が良いと答えた学生は、読む力を挙げた学生が 72.7%いた。次に辞書を使用しての読解力を 54.5%の学生が挙げた。流暢さや聴く力も 4 割近くいた。どの力もある程度得られたと考えているのである。

普通と答えた学生では、58.5%の学生が辞書を引いて理解する力が身に付いたと答えており、次に読む力であった。17.0%の学生が聴く力を挙げたが、成果なしと答えた学生が同じ程度いた。

成績が悪いと答えた学生では 46.4%の学生が成果がなかったと答えた。また、39.3%の学生が辞書を引いて理解する力を挙げている(表 11)。

表 11 自己申告による成績と成果

成果 回答数(人数)	良い 22(11)	普通 73(53)	悪い 32(28)	合計 127(92)
流暢さ	4(36.4)	4(7.5)	1(3.6)	9(9.8)
聴く力	4(36.4)	9(17.0)	3(10.7)	16(17.4)
読む力	8(72.7)	21(39.6)	4(14.3)	33(35.9)
辞書使用	6(54.5)	31(58.5)	11(39.3)	48(52.2)
成果なし	0(0)	8(15.1)	13(46.4)	21(22.8)

成績と授業の進行速度との関係を見てみると、成績が良い学生では、ゆっくりとやや速いと答えた学生がそれぞれ45.5%だった。

普通と答えた学生では、52.8%の学生がやや速いと答え、ゆっくりとかなり速いと答えた学生がそれぞれ24.5%、22.6%であった。

悪いと答えた学生では、やや速いと答えた学生が39.3%であり。かなり速いと答えた学生が32.1%いた。過度に速いと答えた学生も14.3%いた(表12)。

表 12 自己申告による成績と進行速度

進行速度 回答数(人数)	良い 12(11)	普通 53(53)	悪い 28(28)	合計 93(92)
ゆっくり	5(45.5)	13(24.5)	3(10.7)	21(22.8)
やや速い	5(45.5)	28(52.8)	11(39.3)	44(47.8)
かなり速い	2(18.2)	12(22.6)	9(32.1)	23(25.0)
過度に速い	0(0)	0(0)	4(14.3)	4(4.3)
不明	0(0)	0(0)	1(3.6)	1(1.1)

まとめると、成績が良かったと答えた学生は、積極的に勉強に取り組み、理解と記憶および応用力を重視し、読む力だけでなく流暢さや聴く力も身に付けていた。授業の進行速度もゆっくりと答えた学生が多かった。普通と答えた学生では、やや積極的な学生が多かったが、やや消極的という学生もいた。また、大切と考えることでは意味把握が多く、楽しむことや理解と記憶が2割から3割いた。記述式回答では単語の習得という基礎的事項が挙げられていた。勉強の成果では辞書を引いての読解力が多かった。授業速度では、やや速いと感じる学生が多かった。成績が悪いと答えた学生は、英語の勉強に対して、やや消極的・消極的と答えた学生が多かった。大切と考えることでは、意味把握と答えた学生が多かった。成果では、成果なしと答えた学生が多かつ

た。次に辞書を引いて理解することがやや多かった。授業の進行速度に関しては、かなり速い・やや速いと感じる学生が多かった。

5. 考察

5.1 活発型の学生に合った勉強法の必要性

今回のアンケートでは、活発型と答えた学生が64.5%と多かった。しかも、活発型の35.0%が成績が悪かったと答えた。一昨年アンケートでは、活発型に対応する興奮型は、16.9%しかいなかった(安藤・長谷川, 2019)。これは、質問項目が多く、最終的な性格型が中間型も含め6つに分けられたために活発型の学生が分散したせいと考えられる。今回のアンケートでは、3つしか選択肢がなく、他の項目と比較して「飽きやすく集中できない」という質問が適合していると判断して選び、活発型が増えたと思われる。そうではあっても「飽きやすく、集中出来ない」と答えた学生が多いということは、そういう性格の学生に対応した勉強法が求められるということだろう。

活発型の学生は、他の型と比べて勉強に積極的でなく、成績が悪く、授業についていけず、英語が身に付いていない傾向がある。さらに、活発型の学生では、意味把握が大切と考える割合が高かったが、それは意味が分からないからではないかと考えられる。

一方、真面目型の学生は、数は少ないが、勉強に積極的に取り組み、成績も良く、授業にも余裕をもって付いていくことが出来た。このことから、仮説1の正しさが、ある程度証明されたと言える。

5.2 英語の勉強における理解

成績が悪いと答えた学生は、英語の勉強に対して、やや消極的・消極的と答えるものが多かった。そういう学生は、英語の勉強で大切なこととして意味把握を挙げるものが多かった(60.5%)ところから、意味が理解できないところに問題があるのではないかと推察される。また、前回のアンケート(安藤・長谷川, 2020)でも明らかになったのは、成績低迷の学生にとっては、分かることが必要であるということであった。意味の理解が困難である原因として

は、基本的な理解の乏しさが推測される。「成績の悪い学生は、基本的な部分の理解が欠けているのではないか」という仮説²は、明確には証明されていないが、ある程度正しいとは言えるだろう。

一方、成績が良かったと答えた学生では、「一つ一つの英文の理解と記憶」を重視する者が多く、コツコツと勉強することが英語を身につけるためには大切だと判断できる。これは、集中力があれば出来ることである。そこで問題は、集中力が弱い学生をいかに理解できるようにし、さらに記憶できるようにするかということである。それには、小さくまとまった知識が簡単に得られることではないだろうか。

5.3 小さな努力で理解が出来る

集中力が不足している場合には、簡単に情報にアクセス出来、簡単に理解できる教材が必要と思われる。また、飽きやすい学生には、多様な知識が用意され、注意が転換しても、新たな知識が得られることで、勉強が維持出来ると良いであろう。孫悟空が筋斗雲きんとうんに乗って四方八方に飛び回っても、釈迦の手の平の中にいるというイメージである。

例えば、注釈付きの英文であれば、それほど苦勞しなくても、理解できることになる。理解出来るインプット (comprehensible input) が大切と言われる (Krashen, 2004) が、英文が難しくてもその理解を助ける知識にすぐにアクセス出来れば、理解出来た喜びも感じられ、よいと考えられる。しかし、注釈の場合、往々にして理解が困難な事項に付けられることが多い。しかし、英語が苦手な学生の場合、あらゆる面で分からないことが出てくるので、様々な事項を網羅するような注釈が必要となる。

5.4 多層的探索

意欲が乏しい学生が英文を読んで理解出来るためには、多層・広範な知識がすぐに得られることが望ましい。英文を聴いたり読んだりして理解出来ないことがある場合、理解出来ない内容は、多様である。時には単語の発音分からない、時には単語の意味分からない、時には熟語分からない、時には言葉の論理的なつながりが分からない、というように、ある1つの次元 (例えば、単語の意味) が分かれば

いいというものではない。

もともと英語の勉強には、様々な要素が含まれている。言葉には、文化的要素や社会状況の要素が含まれる。文章を理解するためには、単語の意味や構造の理解が必要だし、熟語の理解、特定の文脈で使われる文脈規定性の理解も必要である。また、語用論、統語論、レトリック、文の構造、文章の論理的なつながり、筋道、心理的な問題も考える必要がある。

これらの言語の単位は、階層的に見ることが出来る (下宮, 1994)。例えば、単語は、音素 (母音、子音) が基礎となり、母音と子音が組み合わせられて形態素となり、語となる (風間ら, 1993)。語が組み合わせられて文節が出来、その中には熟語や慣用句などがある。語や熟語、文節が組み合わせられて文となる。さらに文が組み合わせられて、段落となり、文章となる。

言語を学ぶ場合、常に音声のことや語のこと語の組み合わせ、それらの持つ意味、文脈からの解釈を学んでいくことになる。語を見た時、発音に分からなければ音声調べ、意味に分からなければ意味調べ、文章の内容が分からなければ、歴史や文化、習慣を調べることになる。このように言語学習には同時に多層的かつ広範囲な分野の情報収集 (調査・学習) が必要になる。

学生にとって、発音、意味、文法、論理などの内どの点が理解できないか定まっていけないので、様々なレベルの解説があり、学生が必要なレベルの必要な所に跳んで情報を得られることが望ましい。つまり、英文を読んで理解出来るためには、多層・広範な知識が用意されていることが望ましい。こうすることで、英文を読んで疑問に遭遇しても、すぐに解決し理解出来るようになる。少しの努力で満足感を得られれば、学習に楽しさと達成感を覚えられるようになる。

そのために英文を解説する情報はランダムでない方が良い。抽象的知識から具体的知識へと多層配列された情報は、必要な情報を素早く確実に発見することに役立つと言われている (Hung et al., 2008)。

5.5 多様な知識の提示は飽きさせない

また、様々な情報が秩序立てて配列されていると、

知識の乏しい学生だけでなく、知識豊富な学生にも理解しやすいと言える。すでに知っている情報は飛ばし、必要な知識を得て勉強できる。

また、活発型といった集中力が乏しく、雑多な情報に目移りする学生では、豊富な情報が整然と用意されていると、注意を諸所に転換させて情報を楽しめることになる。特定的话题に集中すると飽きる学生にも楽しめる教材ということになる。

5.6 多層化された教材

実は、著者らの教材は、ある程度多層化された情報提供をしている(長谷川・安藤, 2014)。作成した教材は、18のレッスンから構成されている。各レッスンは、「説明、会話、質問、答え」で成立している。日常の会話を聞いて、次に何が起こるかなどを考えさせるようになっている。短い会話と考えさせる内容は、集中力のない小学生にも受け入れやすいと思われる。また、各文は、単語、句、文節、文ごとに分かれて解説され、発音練習出来るようになっている。つまり、どんな生徒でも分かるように多層的に理解出来るようにしているのである。

例えば、It's very hot today. には、文全体の日本語訳があり、さらに、「It's very hot」と「today」の訳と説明があり、さらに、各単語の訳とつながりの説明もある。文を一つのチャンクとして理解する生徒は、そのまま次の文に進む。しかし文を一つのチャンクとして理解できないが句を一つのチャンクとして理解出来る生徒は、句の訳と説明を参考にする。句が一つのチャンクとして理解出来ない生徒はさらに単語の説明を参考にするのである。このように多層なレベルの解説を用意することで、異なる能力の生徒のニーズに応えられるようになっている(長谷川・安藤, 2018)。

その教材は、小学生にも大学生にも効果のあるものと分かっている(長谷川・安藤, 2017)。しかし、多層的説明の効果までは確かめられていない。また、多層的な説明に関する研究も見当たらないので、現在は、効果がありそうであると予測するだけである。

例えば、真面目型の学生は、英文に集中し、英文が分からない時には、多層的な説明を活用すればいいのである。整然とした説明が用意されていて英文のレベルを落とさなくても良いので、出来る学生に

も向いている。また、文化的背景や慣用表現の説明もあれば、ゆったり型の学生も英文の意味を味わいながら英文を鑑賞できる。このように多層的に知識や説明が用意された教材は、学生のどのような性格にも合ったものと言える。もっとも本論では、授業を補うための、多様な学生のニーズに応えると予想される教材を提案するだけである。多層的説明が付いた教材が、本当に集中力のない学生にも、集中力のある学生にも有効かどうかを確かめることは、将来の課題として残っている。

6. 謝辞

本研究は、植草学園大学令和元年度共同研究費の助成から補助をいただきました。ここに記して謝意を表します。

文献

- 安藤則夫, 長谷川修治 (2015). 「レミニセンスと学習効果—小学生用英語学習プログラムからの考察—」『植草学園大学研究紀要』第7巻, 25-35.
- 安藤則夫. 長谷川修治 (2018). 「英語学習における弛緩性の情緒の役割—大学生における英語学習評価と情緒表現型の関連性からの検討—」, 『植草学園大学研究紀要』第10巻, 63-72.
- 安藤則夫. 長谷川修治 (2019). 「英語学習における学習スタイルと適合性—英語教育に対する大学生の適合感と好感度, 効力感に基づく検討—」, 『植草学園大学研究紀要』第11巻, 17-28.
- 安藤則夫, 長谷川修治 (2020). 「英語教育におけるアクティブ・ラーニングを支える要因—アクティブ・ラーニングを学生がアクティブにするための考察—」『植草学園大学研究紀要』第12巻, 37-48.
- Coffield, F., Moseley, D., Hall, E., and Ecclestone, K., (2004), *Learning styles and pedagogy in post-16 learning: A systematic and critical review.*
- 長谷川修治. 安藤則夫 (2014). 「学習効果の高い小学生用英語教材の開発—その詳細説明と試用試験による検証—」, 『植草学園大学研究紀要』第6巻, 27-36.
- 長谷川修治. 安藤則夫 (2017). 「デジタル英語教材を使用した個別学習の習熟度別効果—小学校5年生のり

- スニング力と情意面について一], 『植草学園大学研究紀要』第9巻, 41-50.
- 長谷川修治, 安藤則夫 (2018). 「子どもの発達段階と記憶を重視した英語指導法の効果—小学校5・6年生用デジタル教材の開発から—」, 『植草学園大学研究紀要』第10巻, 51-62.
- Hung, P. W., Johnson, S.B., Kaufman, D.R. & Mendoca, E.A. (2008). A multi-level model of information seeking in the clinical domain. *J Biomed Inform*; 41(2), 357-370.
- 風間喜代三, 上野善道, 松村一登, 町田健 (1993). 『言語学』東京大学出版会, 東京.
- Krashen, S. (1981). *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.
- Krashen, S.D.(2004), *Free Voluntary reading: New Research, Applications, and Controversies*, Paper presented at the RELC conference, Singapore.
- Matthews, G. (1999) 'Personality and skill: A cognitive-adaptive framework', in P.L. Ackerman, P.C. Kyllonen and R.D. Roberts (eds), *The Future of Learning and Individual Differences Research: Processes, Traits, and Content*. Washington, DC: APA. 251-270.
- Sadeghi, N., Kasim, Z.M., Tan, B.H. & Abdullah, F.S.(2012), *Learning Styles, Personality Types and Reading Comprehension Performance*, *English Language Teaching*, 5(4), 116-123.
- 佐伯智義(1992), 「科学的な外国語学習法」, 東京, 講談社.
- 下宮忠雄. (1994). 『第4章 言語の構造』, 田中晴美, 樋口時弘, 家村睦夫, 五十嵐康男, 下宮忠雄, 田中幸子 『入門ことばの科学』, 大修館書店, 東京.

性格と英語の勉強の仕方に関するアンケート

2020. 7. 29

私の考える性格類型と英語学習の仕方や習熟に関するアンケートです。データは紀要執筆や英語学習プログラムの作成、教員への助言に活用します。

1. 年齢, 性別。

() 歳, (女性 男性)

2. あなたの性格から見た勉強法は何ですか。

1. 真面目型。読書や勉強に集中できる。時間の経つことを忘れることが多い。
2. 活発型。読書や勉強では飽きやすいし、余分な考えが浮かび集中できない。
3. ゆったり型。読書や勉強をして、意味や心情が分かって、満足感を覚える。

3. 中学・高校での英語の勉強がどうだったか思い出してください。

① 今まで英語の勉強のやり方。

1. 学校でも家でも積極的に勉強した。
2. 学校の授業について行ける程度に勉強した。
3. 学校でも家でも、それほど出来なかった。
4. 学校でも家でも、ほとんど出来なかった。

② 英語の授業の成績は。

(良かった, 普通, 悪かった)

4. 英語の勉強についてのあなたのご意見。

1. 一つ一つの英文をしっかりと理解し覚えることが大切である。
2. 細かいことは考えず、文章全体の意味が分かれば良い。
3. 英文を読んで、感動し面白いと感じることが大切である。
4. その他、大切なことは ()

5. 英語の勉強で実際に身についたこと。複数回答可。

1. いくつかの英文をしっかりと覚え、スラスラ言える。
2. ある程度、英文を聞いて分かる。
3. ある程度、英文を読んで理解出来る。
4. 辞書があれば、英文を読んで理解出来る。
5. 英語が、身に付いたとは言えないレベルである。

6. 英語の授業の進行について。

1. 学習が身に付く程度にゆっくりだった。
2. なんとかついていける程度。
3. 進行が速かった。ついていくのがやっと。
4. 速すぎた。

感謝。

回答欄。コピーしてメールまたはストリームで送ってください。名前、学籍番号は消去し、結果だけを残します。(回答欄は省略)

Abstract

Personality Types and Why Students Fail to Master English in Junior and Senior High School

Ando Norio^[1], Hasegawa Shuji^[1]

[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

Many Japanese students are weak in English. The authors propose and attempt to confirm that the method of English education of junior high school and high school does not match the personality of students. Individual difference in student's personality should affect motivation, learning style and achievement level. We attempted to clarify learning needs of each student as well as personality differences by administering a questionnaire asking university students about their personalities and history of English learning in junior high school and high school. Results showed that students with an active personality are prevalent. They lack the ability to concentrate, have negative feelings toward English education and low levels of achievement. It was proposed, therefore, that English education should be targeted to reduce difficulties for this type of student. In addition to this, comprehension was deemed important. It was concluded then, that students of every personality type need materials offering multilayered information about English language in order to acquire the necessary information more easily. The applicability of this conclusion was considered.

Keywords: Personality type of students, active type, understanding English, learning material, multilayered information.